

凡例

・本ポスター発表において、『村上春樹全作品 1990～2000 ⑦ 約束された場所で 村上春樹、河合隼雄に会いに行く』（講談社、2003年）、村上春樹『ねじまき鳥クロニクル 第2部 予言する鳥編』（新潮社、1994年）、『新潮』第122巻第5号（新潮社、2025年）、『新潮』第122巻第11号（新潮社、2025年）を参照する。

・引用頻度の高い『新潮』第122巻第5号から直接引用する際には α 、『新潮』第122巻第11号から直接引用する際には β と表記する。

・本ポスター発表において直接引用を行う際には、引用した箇所後に丸括弧でアラビア数字と「頁」という字を記載することで、該当の引用ページ数を示すこととする。

村上春樹『武蔵境のありくい』における「コミットメント」について

山田 栄官(一橋大学大学院言語社会研究科修士課程修了)

1 導入

(1)村上春樹にとっての「コミットメント」

・長編作品『ねじまき鳥クロニクル』を巡る、村上春樹(以下、村上)と河合隼雄との対談

…「**コミットメント**というのは何かというと、人と人との関わり合いだと思っただけけど、これまでにあるような、「あなたの言っていることはわかるわかる、じゃ、手をつなごう」というのではなく、「井戸」を掘って掘って掘っていきと、そこで**まったくつながるはずのない壁を越えてつながる、というコミットメントのありよう**に、ぼくは非常に惹かれたのだと思うです。」(『村上春樹全作品 1990～2000 ⑦ 約束された場所で 村上春樹、河合隼雄に会いに行く』、講談社、2003年、292頁、なお発表者が適宜濃い青を付した。)

・本ポスター発表では、村上の最新連作短編にあたる『夏帆』シリーズにおいて、上記の対談で議論されている「コミットメント」、すなわち**まったくつながるはずのない壁を越えてつながる**ありようがどのように表現されているか示すことを企図する。

1 導入

(2)「ゼリー状の感覚」を巡って

・『ねじまき鳥クロニクル 第2部 予言する鳥編』では、主人公・岡田トオルが壁を越えて、ある日突然失踪した妻・クミコが存在している208号室がある場所へと向かう際に、彼の周囲にある硬質であったはずの壁がゼリー状の物質へと変化を遂げるありようが明確に示されている。

→『武蔵境のありくい』においては、以下の場面に、主人公・夏帆が1匹の雌のありくい(後述する「ありくいの奥さん」)から言葉を受ける際に、「**ゼリー状の感覚**」を抱く。

①「まわりにあるすべての事物が急速にその輪郭を失い、混じり合ってひとつの混沌になった。身体全体が**温かなゼリーに包まれたような感覚**があった。そして一匹の大きなありくいが彼女の前に後ろ足で立ち、語りかけてきた。とてもクリアな声できっぱりと。」(α 、8頁)

②「状況も、告げられる文言も、それを口にする雌のありくいの真剣な表情も、澄んだ声色も、そのとき**夏帆の身体全体を包むほんのりとしたゼリー状の感覚**も、細部にいたるまでそっくり同じだった。まるで同じフィルムがリピート再生されているみたいに。」(α 、9頁)

1 導入

(3)『武蔵境のありくい』における夏帆とありくい夫婦の関係

…2025年8月30日に開催された一汎文学会における発表(題目「村上春樹『武蔵境のありくい』における夏帆とありくい夫婦のつながりについて」)において言及。

・「**ゼリー状の感覚**」を通して、夏帆の「まわりにあるすべての事物が急速にその輪郭を失い、混じり合ってひとつの混沌」(α 、8頁)になる。本来ならば夏帆と彼女以外の他なる「すべての事物」を区別化するはずの「輪郭」が、通常よりも不明瞭な**ものに姿容を逃げ、それらが「混じり合ってひとつの混沌」**になる際に、夏帆は「**ゼリー状の感覚**」を抱いている。

→本来であれば人間とありくいは異なる動物であり、言葉を用いて対話を行い、相互に交流を図ることは不可能である。夏帆が「ゼリー状の感覚」を抱く経験を通して、彼女とありくいを隔てる性質上の境界線が曖昧化されている。

・「**ゼリー状の感覚**」は「**温かな**」ものであると形容されていることから、言葉を介さずに成立している、ありくいと非現実的な関係を夏帆は好意的に捉えているといえる。

→これまでの生活において対人関係が希薄で、ほかの誰かに対して積極的に関わることを意識的に避けていた夏帆は、「**ゼリー状の感覚**」を抱く体験を経由することで、彼女以外の他なる存在の深い心情にアクセスする機会に開かれてゆく。

2 『武蔵境のありくい』における「コミットメント」について

○『武蔵境のありくい』における「コミットメント」の解釈

解釈①:本来であれば生じえない、夏帆とありくい夫婦のつながりの発生(既発表)

解釈②:本ポスター発表の新規性

2.1:「**モーターサイクルの男**」に関する記憶の継承

2.2:『夏帆とシロアリの女王』(連作短編『夏帆』シリーズの3作目で、『武蔵境のありくい』の続編にあたる作品)において示される、夏帆の母への「**コミットメント**」

2.1 「モーターサイクルの男」に関する記憶の継承

(1)『武蔵境のありくい』の場合

・『夏帆』(『夏帆』シリーズ第1作目)を踏まえて、「野太い機械音」(α 、18頁)で、「巨大な心臓の鼓動を思わせる不気味な音」(α 、18頁)である、「大型のモーターサイクルのエンジン音」(α 、18頁)に、夏帆が苦悩している姿が示される。

・夏帆が「ときや」を訪れて「シロアリの瓶詰め」(α 、26頁等)を受け取る代わりに、ありくいの夫が「気味の悪いモーターサイクルの男」(α 、26頁)から夏帆の「身の安全を守」(α 、40頁)るべく、「夜ごとその鋭敏な耳を澄ませ」(α 、26頁)るといふ、「相互的な信頼感」(α 、40頁)にもついた関係を築く。

→「大型のモーターサイクルのエンジン音」をありくいの夫が察知したことで、夏帆は「モーターサイクルの男」の脅威に関する記憶をありくいの夫婦と共有することができた。

結果的に、夏帆は、ありくいの夫婦と「意外にまっとうな、実のある関係」(α 、40頁)を築くことができたと感じている。

2.1 「モーターサイクルの男」に関する記憶の継承

(2)『夏帆とシロアリの女王』の場合

・『夏帆とシロアリの女王』において、シロアリの女王が、夏帆の母の身体を「乗っ取」(β 、24頁)り、母の記憶を共有することで母と「一体」(β 、52頁)化してゆく。このように夏帆の母と「人格の融合」(β 、52頁)を図るシロアリの女王が、「モーターサイクルの男」と「婚外性交渉」(β 、29頁)を密かにに行っているのではないかという懸念を夏帆が抱く。

→「モーターサイクルの男」:「僕らはたぶん、まだどこかでかたちを変えて出会うことになるだろう。それは言うならば**運命のようなものなんだ**。」(β 、29頁)

…「モーターサイクルの男」との関係は完全には切ることができない「**運命**」にあることが示されている。夏帆が個人的な「**運命**」から逃れることができないという主題は、みずから引き受けるべき現実の課題から目を背けずに向き合う必要があるという「**コミットメント**」の議論につながっている。

→『夏帆』以降、反復される「モーターサイクルの男」に関する記憶を、夏帆は「**ゼリー状の感覚**」を経由して、普段ブラジルに生息するありくいの夫婦と共有する。夏帆の個人的な記憶に留まらず、「**コミットメント**」を発生させる契機といえる、ありくいの夫婦との関係においてもその記憶が継承されてゆくありようが示される。

2.2 『夏帆とシロアリの女王』における「コミットメント」

(1)「ゼリー状のつつつした半透明な壁」

・「ありくいの奥さんが現れたのはその日の夜だった。彼女は夏帆の夢の中に姿を見せた。いや、より正確に言うなら「夢らしきもの」ということになるだろう。それはいつもと同じように夢でありながら夢ではなかった。覚醒した夢という表現が近いかもしれない。今回のその場所は、**ゼリー状のつつつした半透明な壁**で周りを囲まれていた。そして二人(夏帆とありくいの奥さん)は青々とした丸い草むらの上に座っていた。草むらの直径は五メートルほどだ。草はしっとり柔らかく、座り心地がよかった。いつまでもここにそのまま座っていたいという気がするくらい。」(β 、23頁)

→『武蔵境のありくい』の「ありくいの奥さん」が『夏帆とシロアリの女王』で登場する際に、夏帆は「覚醒した夢」を見る。そうした「夢」における、「**ゼリー状のつつつした半透明な壁**」で周りを囲まれ、た環境のなかで、夏帆は「ありくいの奥さん」に、気がかりな母の様子を相談する。

→本来であれば硬質で透明ではないはずの壁が「**ゼリー状の**」「**半透明な**」ものに変質するという特徴は、先述した『ねじまき鳥クロニクル』に登場する壁の特徴と同様である。通常は何かを分断させる機能を果たすはずの壁が、夏帆と「ありくいの奥さん」の非現実的な関係をつなぐ機能を果たす。

2.2 『夏帆とシロアリの女王』における「コミットメント」

(2)夏帆と彼女の母の対話

・「物心ついてから今現在に至るまで、母親に対して無条件の親近感を抱いた覚えがなかった」(β 、10頁)という夏帆にとって、母は、本来であれば「人が成長する過程において重要な役割を果たすはず」(β 、10頁)である、親の身体の「匂いや触感の記憶」(β 、10頁)を子どもに「与え」(β 、10頁)ることのない存在であった。

→今回の母との対話を経て、夏帆は「母親でもあるシロアリの女王と面と向かって対決し、わだかまっていた思いを勇気を出して相手にぶっつけ、そこにある真実(らしきもの)を自分の手で引きずり出すことができたのだ」(β 、56-57頁)と手ごたえを感じている。

→母親がシロアリの女王に「乗っ取られ」(β 、24頁)るという非現実的なできごとを経由することで、これまで「薄紙が一枚はさまったような感覚」(β 、10頁)を抱いていた母との関係において、はじめて夏帆は自身の本音を母に対して開示し、母からの応答を踏まえて自身と向き合う機会を得ている。

3 結論

○みずからの課題と向き合いはじめる夏帆

・『武蔵境のありくい』において、「ときや」の店主に刃物を突き立てるかどうかが逡巡している夏帆の背中を、ありくいの夫が「背後からどんと押」(α 、46頁)すことで、悪しきジャガーを殺すという「**責務**」(α 、46頁)を夏帆に果たさせる。

・『夏帆とシロアリの女王』において、「ありくいの奥さん」から、母との微妙な関係が夏帆にとって「心の重荷になっているのであれば、その重荷は取り除く必要がある」(β 、36頁)、母を「シロアリの女王から救い出」(β 、36頁)すことで、夏帆は自分「自身を心の檻から解放できるかもしれ」(β 、36頁)ないと伝えられる。

→本来であれば「**まったくつながるはずのない**」ありくいの夫婦やシロアリの女王との関係を通して、夏帆は自身に課せられた「**責務**」や、彼女が囚われていた「心の檻」という個人史と向き合い、現実の「**自分自身の世界**」(β 、57頁)へと回帰してゆく。